

釋 迢 空 編

曙 覽 の 研 究

東京 高 達 書 房 刊

昭和九年 一月四日 印刷
昭和九年 一月十日 發行

略覽の研究 正價金貳圓八拾錢

編者 折口 信夫

發行者 東京市神田區小川町一丁目三番地
森 山 讓 二

印刷所 東京市京橋區湊町三丁目十番地
株式會社大倉印刷所

806

東京市神田區小川町一丁目三番地

發兌 高遠書房

電話神田三〇八〇番

發賣所

東京市神田區小川町ビル
振替東京三一九番

森山書店

大賣捌

東京・東京堂 栗田書店 上田屋書店
大阪・大阪寶文館 福音社書店

目次

松籟艸		一
樞襍艸		二六
春明艸		一九
君來艸		二六
白蛇艸		三五
福壽艸		三九
曙覧の研究のはしに		釋 迢 空
年譜		
索引		

松^{マツ}
籟^{カゼ}
艸^{グサ}

第一集

阿須波山にすみけるころ

あるじはご 人もし問はず、 軒の松 あらしこいひ
て、 吹きかへしてよ (一)

【文】 この歌には、背景となつてゐる曙覽の生活が、強く打ち出されてゐる。息今滋氏の記になる小傳によれば、少壯時漢書の梁竦の傳「大丈夫居世、生當封侯、死當廟食。如其不然、間居可以養志、詩書可以自娛。」とあるを見て大いに感ずるところあつたとある。世を遁れて貧しい生活を續けながら、この道に志すことの如何に強いものがあつたかどうなづける。道に精進するものにとつて、うるさく感ずるものは、かゝり少い人の來訪である。殊に世を遁れて（先祖以來の財産さへ弟に譲つて）この道にひたむきならうとする曙覽の心は容易に窺知し得られる。

「あるじが在宅かどうか、と人の來訪する事もあつたら、軒の松よ。不在であるといつて歸らしてくれよ。」と言ふのが一首の意であらう。「人」に特定の意味を持たせず考へた方が穩當である。「松」「嵐」「吹き」と縁語をたより、「あらじ」を「あらじ」の意味に掛けてゐるあたりに、當時この人にして脱却し切れなかつた技巧が一首の味を削いではゐるが、屈託のない表現とやはらかな考巧さとを假りて、來訪者のうるさゝわづらはしさを出してゐるのは、くらしの背景も思ひ出されて興味を感じる。

【悠】かうした言ひ方は我々にとつてはもう過去のものである。けれども、志濃夫適舍のものとしてはそこに生命を感じざるを得ない。あるじ、もし、あらじ、かへしと尾韻の見出されるのも全然偶然だとは言はれないやうな氣がする。松籟艸の名は勿論この歌から來てゐるのであらう。この歌の生れた動機は家にこもつてゐる時、松に吹きつける嵐の音をきいたのであらう。そして、「あらじ」といふ言葉から「あらじ」といふ意味を聯想したところにあるやうである。さればこそ上句の力のない調子が現れたのである。次に「秋のころ人しげく來にけるにわびて」といふ詞書の歌があるところを見ると、この歌もやはり人の訪問を厭ふところから生れたものゝやうに考へられないこともないが、必然性が薄弱である。かういふ氣もちもあつたことは事實であらう。然しそれを門の松に托するにはそれだけの機縁がなくてはならない。それが前述の松籟—あらじ—あらじ、こゝにいたつて日頃の心がふと目をさましたのである。かういふ過程のもとにつくられたものはすべて調子の低いものになつてしまふとは思はれないが、動機にゆるみがある以上已むを得ないことである。「かきよせて拾ふもうれし。世の中

の塵はまじらぬ庭の松の葉」といふ歌の下句によつて翁が松といふものに浮世離れた清淨さを感じてゐたらしいところから見ると、門の松に依頼したのは不自然でもないやうである。それにしても作歌の動機は動かないと私には考へられる。若し俗流を厭ふ心が燃焼して出来たものとするなら、同じく松に結びつくにしても、かうした形にはならなかつたと思ふ。「吹きかへしてよ」といふ言葉も強さを持たないものになつてしまつてゐる。歌調からいつて、たゞ松に對する親しみ心が妙に出てゐる。ひよつとすると、現に家にありながら、門の松籟にきゝとれてゐる。今訪問者があつてこの境地を亂されるのは辛い。追ひかへしてくれる者があるといふ。「門の松よ。お前に頼むよ。」といふやうな心境かも知れない。それにしてもすなほに受けとるわけにはいかない。それほどの澄んだものは出てゐない。古い技巧にわざはひされた歌だと思ふ。

【降】掛詞で一首が構成されて居る事が、何人の眼にも首肯出来よう。あらしは不在でもあり、嵐でもあり、居留守を無理にでも歸つてほしい氣分を表しても居る。と一應は作者の氣もちを汲んで見る。けれども、迫力がない。孤獨をわびながらもなほ靜寂の境を欲する。心より語り明さむ友の無きをかこちつゝ趣味に生き、統一を見出さんとして苦しんだ兼好の先覺者の生涯が、むしろ一步を先んじて居るやうに思へる。複雑な心理表現が、この一首には盡されて居ない。

【显】乏しく住む人には、空の雲、軒の風、一木一草、悉みな懐しい心の友でなければならぬ。かうした境界に在るらしい作者の倂が沁みくゝと偲ばれる詠である。作者に關しては恥しい位知らな過ぎる私の貧弱極る記憶に

従へば、作者は徳川末期の福井在の萬葉歌人、その歌論も可なり直截のもの言ひをしてゐる由だがそれにしてもこれは何と素直な詠み風である事か。「軒の松 あらしといひて」この掛詞は人に依つては排するか知らぬが、私は却つて興趣があると思ふ。或はこんな點に興味を持つのは邪道であるかも知れないが、曙覽にはこの用法が隨處に在つて、その大部分が決して嫌味でない。それにこれは又當時としては、寧ろ新しかつたものではあるまいか。そして、この松こそは心底からの作者の友である。この歌の中心・主人公は松である。松にさへ及ばぬ人を否む氣もちは、一層松に索きつけられ、松への愛着は自然とこのやうに呼びかけずには居られなかつたのであらう。私はこの一首から純粹な心がどんなに美しく人に働きかけるものかを痛切に教へられた事である。

【追】 この本を讀んでいたゞく方々に、ひと言申して置く。最初しばらくは、御覽の通り、同人の筆ならしで、極めて謙遜な言ひ方もあれば、又思ひあがつたやうに見える書きぶりもある筈だが、やがて一致して曙覽の本質的なものをつかまうとする努力が、可なりの効果を見せるやうになつて來ました。そのつもりで氣長く御覽を願ふ。單に曙覽の歌についての研究といふばかりでなく、曙覽を見ようとする人々の心の姿を見て行くといふことも、今の新しい國文學の一つの大きな態度でなければならぬ筈である。私も同人とひとつに、ところ／＼口をはさまして貰ふ。

短歌には、類型を豫期することの出来るものと、全然それを脱却したものと、二通りある。そして、それが典型的であるといふ一事を以て、否定しきつてしまふ事は大きな間違ひである。少くとも、大きな短歌の歴史的展

開の跡から見ると、類型的でない短歌は殆どなかつたのである。この歌などは、類型の極めて多い事を豫期することが出来る。だが、その類型の多くが集つて醸し出した氣分を流用して、其等のものよりももう少し濃厚なものに進み入らうとしてゐることが見受けられたとしたら、それはやはりその點に於いて、よい作物だとするだけの態度は用意せられてゐねばならない。つまり、短歌に於けるおもむきといふことが本質的に如何に重要であるかといふことを説明するのには、この歌などは、非常に適切なものを持つてゐる。譬へば

岡のべの里のあるじをたづねれば、人は答へず。山おろしの風（慈 圓）

なども曙覽の漠然とした意識のなかにははひつて居る筈だ。だから、「山おろしの風」を意味する「あらし」がこの歌に表れなかつたとはいへない。又譬へば、最近いところで

軒の松。むかしの友といふばかりわが山ずみの年も經にけむ（宣 長）

（宣長としてはすぐれた部類に屬する）などもこの歌のための無意識の準備になつてゐないとは言へまい。その外かういふ種類のを踏まへてこの歌が出来て居り、そしてその上に立つて多少でも個性を展いてゐたとしたら、やはり問題としていふわけだ。たゞさうした氣分に溺れ過ぎて、描寫を疎かにした難が深い。同人の言はれたやうに、「あらし」が「あらじ」を思はせて居るのか、「あら」だけで「あらず」を考へさして居るのか、實は明言出来ない。それ位のことでは説明出来なければ表現力が不足なので、その點は歌なるが故によいとはいへない。「吹きかへしてよ」も可なり甘い言ひ方である。つまり、下の句のやうな、現實を空想化していふのが風流第一

だといつた考へが、この翁にもあつたのである。

飛彈國にて、白雲居の會に、初雁

妹と寐る　ここよ離れて、此あさけ　鳴きて來つら

む　初かりの聲　(三)

【眞】技巧趣向の末技にのみ腐心する如き不自然なる時流を嘲つた彼の歌として見るには、餘りに作り歌である。歌も亦創作の域に迄達しなければならぬものと考へてゐる私は、かうした情念を想像の上に呼び起す事を必しも悪いとは思はないが、尠くともこの歌に關する限りに於いては、そこに何等の必然性をも伴はない單なる技巧であり、趣向に過ぎない。「妹と寐る　ここよ離れて、此あさけ」は、どう見ても或古歌を意識に上せて作つたものとしたか考へられない。「歌を學ばむには、萬葉集中の新體なる、古今集中の古體なる歌に着眼し、これを模範としなば、はじめてよきうたをよみ得べし。」というてゐる彼を思へば、或は古今集卷二十の「水莖の岡の館に、妹とあれ　ねての朝けの霜の降りほも」などが、この歌の根據となつてゐるのではあるまいかと考へられる。要するに遊戲的技巧の域を出でない歌といふ他はない。

〔追記〕古來雁は常世雁など詩にも作られ、歌にも詠まれてゐるところから、第二句「ここよ離れて」は、

常世の國を離れてはる／＼と渡つて來てといふ「常世離れて」ではあるまいか。そして「常世離れて」を直ちに「牀よ離れて」に通はせ、「牀よ離れて」により深い愛執を持たせるために、第一句「妹とぬる」としたのではないからうか。さう見る時、第四句「鳴きて來つらむ」は、一層效果的に考へられる。「牀よ離れて」を受けて、第三句「此あさけ」としたところにも、作者の用意のほどがうかがはれる。かう見ては餘りに穿ちすぎた見方であらうか。然し縁語・類語・掛詞の技巧を好んで至るところに見せてゐる彼の歌として見る時、強ちこじつけとも思へない氣がする。その趣向、その技巧のうまさに至つてはまことに及び難い。然しこの歌をば遊戲的技巧の域を出でない歌であるとする私見に變りのないことを私は信じて居る。

【勇】 飛彈國の白雲居の會といふのは、田中大秀翁を中心にした越前の人達が歌の集ひではないかと思ふ。その考への立脚を參考までに記すと、曙覽が大秀翁に入門したのは弘化元年（天保十五年）八月十三日で、大秀翁六十八の晩年である。滞在期間こそ十四日程で、二十七日には歸國したが、初雁の題に相應しい季節である。この時入門の喜びを詠じた長歌が蘆屋詠草の中にある。その中に

如此のみに 止む可きかはと 朝霧の 思ひ立ちつゝ 雲居行く 初雁金と 一連に
我が家を出でゝ

といふ「師翁の御許に飛彈國に物學びにまゐるゝよめる」歌がある。而も同行者は越前福井の人で、山口彦三郎、三崎玉雲、久世愿五郎の三人である。（田中大秀年譜による）一連といふ語がよく場合を説明してゐる。で、私は白

雲居とはこれら四名に大秀翁が歓迎の意味で會を開いた時に使つた臨時の名ではないかと想像したのである。早朝初雁の鳴き聲を興味とするのは表面で、實は曙覽等自身を初雁として歌つた歌と解すべきである。さう考へると、首句「妹と寐る」とこよ離れて」が本道に解つてくるのである。單に古今集の「とこなつの花」(卷三夏歌の結句)や「水莖ぶり」(卷二十)の引用歌として味ふべきでない。妹と寐る牀を離れて來てゐるのは彼自身であつて決して事實の初雁でない。そこにちよつと讀者は曙覽らしいと苦笑を禁じ得ないものがあらう。しかし、さういふ概念をとり除いてこの歌を見る時は古今集の歌がなくては意味に妙な作意を感じて來る。譬喩歌としてはとにかく軽く笑ひを含んでゐる。しかし態度がやはりよそ／＼しいのは缺點である。松籟卿は年代順に並んでゐないことを附記する。

【誠】詞書の「白雲居の會」のことは未だ明らかにしてゐないが、多分その師大秀らを中心とした歌會であつたらうかと推量せられる。この作は一首としては空想的な感銘の薄いものになつてしまつてゐる。これは題詠といふこと、殊に「初雁」といふ題そのものゝ罪であつて、作者の罪ではない。寧ろ、この歌の上句などに窺はれる調子の張つた發想、大膽な手法は、曙覽の作として、殊にそれが初期のものであるだけに、注意すべきであると思ふ。曙覽が既に當時に於いて、かゝる練れた技巧に達してゐたといふ事は、興味深く思はれる。後にこの技巧が益々圓熟すると共に、一方にはどこまでも事象を觀照してそこに自己の主觀を投げ入れて「曙覽張り」の境地を拓くに至つたのである。「白雲居の會」に於いて、曙覽の歌才の程が大秀をはじめとして一座の者をして、

どんなに驚異の眼を睜らしめたであらうかといふ事が想はれる歌である。曙覽自身も亦初期に於いては、かゝる技巧に興味を持ち、可なり得意を感じてゐたのかも知れない。

【迢】松島君の説のやうに、「妹と寐る」は牀を起すため、そして常世に所謂掛けてゐるのだ。常世のまればといはれて居つた雁が、即その遠い常世の國を離れて來るといふ想像を前提にして、この歌を作つたのは勿論だ。が、牀より離れたといふ二重表現を目的としてゐることは確かである。そのために、「妹と寐る」が村崎君説のやうな風にも感じられるのだ。ともかく、曙覽は、雁が常世の國を離れて……といふ第一義の上に、その雁が雁の妹と寐る牀より離れて、といふ意義を思はせるやうに作つてゐるのは事實だ。つまり、製作の途中に偶然現れた寄り道を楽しんでゐるといふところがある。だが、それはそれとして、「常世の國を離れて」といふ風に見れば、極めて直截にひゞく。だから、「妹と寐る」がこの場合きゝ過ぎてゐるのだ。その點の關心を弛めて見れば、この歌はよい歌といはねばならぬ。何故ならば、曙覽の歌は曙覽の時代に於いて見るといふことが、少くともいつの世に於いても同じ見方で見るといふ態度の外に、まづ持たなければならぬことだから。

さうして、このやうにひた押しに歌ひ上げたものといつては、さう澤山あるわけのものでないといふことも注意していただきたい。村崎君説は面白いが、大秀が、越前から來た一行によみかけたものとして、初めて面白くなるのだ。

同國なる千種園にて、甲斐國のりくら山に、雪の降りけるを見て

旅ごろも うべこそさゆれ、乗る駒の鞍の高嶺に、

み雪つもれり (三)

【利】古今集の「夕されば、ころも手さむし。みよしのゝよし野の山に み雪ふるらし」「みよしのゝやまのしら雪つもるらし。古里さむくなりまさるなり」に對して感じ方を逆に行き想像を斷定に換へて、調子がすつと高くなるが、結局同曲の歌である。作者はこれらの歌を意識して作つたかどうかは知らない。事實この表現は非常に大柄で單純化せられてゐるために、中世の古今集から萬葉集あたりをねらつてゐた時代にも恐らく意識せずに、この類型歌が相當出來てゐるのではないかと思ふ。然しこの曙覽の歌を見ると、その意識してゐたか否かを問はず結局類型歌となり、借りものゝ感動と言ふ氣がして感銘の淡いものになつてしまふ。殊に、すぐれて調子の調つた格であるがゆゑにこの感が一層深い。一體かういふ歌は從來相當もてはやされて來た様で、私も佳い歌だと言はねばならぬのかも知れないが、然し今の我々の感覺をとほして見たとき、餘りに單純で鈍感な歌ではないだらうか。もつと個性があらはれ、鋭さとでりかしゝとが感ぜらるべきではないかと思ふのである。

【周】 本居系に屬する幕末歌人には、美しい抒情風な歌を詠んだ人が出た。加納諸平の様に、新古今の華麗を見せながら歌ひぶりの純粹になつてゐるのは、元義流の萬葉主義よりも、文學的に高く評價せらるべきものと思ふ。曙覽は萬葉集の精神に生きた人ではあるが、必しも萬葉萬能ではなかつた。新しい生命を吹き込んでゐると共に美しい抒情味を湛へてゐる。高邁な人格、高邁な品位を見せてゐる。この歌は丈の高さがいゝ。高山の新雪に對する爽快な感じが、高い調子の上によく出てゐる。乗鞍山を鞍岳とでも言つた事があつたのであらうか。さうでなくても、「乗る駒の」と言つて來れば、自然と乗鞍山なる事がわかる筈ではある。また「乗る駒の鞍の」を高嶺の序として用ゐてゐるといふ風にも見られる。とにかく「乗鞍」といふ名をこんな風に變へて用ゐてゐる所に技巧があるといへよう。感じは單純である。言葉に餘裕がある。唯第一句はこの歌の調子を高めた効果はあつても、この詠数は、堂上歌人の心もちとさ程選ぶ所がなく、空虚といふ感がしないではない。

【増】 田中大秀に入門した當時の曙覽は三十三歳になる筈であるから、歌についての心が、もつとしつかりして居なければならぬと思ふ。この邊の歌では、調べが單調なばかりでなく、生活に心をぶちこんで居るやうな所がない。が、感じ方などは、そのころの歌壇としては、新鮮なものだと思ふ。言葉の上では枕詞や接頭語を用ゐて居るが、感じ方は、たしかに純粹である。變なひねくりがない。旅のひそかな氣分をつかんでゐると思ふ。たゞ歌會式である。心の持ち方に深みがない。

天保十年に江戸に出て、戻つたところから、萬葉に興味を感じて、歌作もしたらしい作者である事を思ふと、こ

これらの作がもつと初期のものゝ様にも考へられる。ともかくこの純粹な感じ方に飛躍があつたのだらうと思ふ。

【迢】こゝの「うべ」は過去のことを領得し得てゐる言ひ方だ。つまり、昨夜とても寒かつたがなる程その筈だといふところだらう。現に着物を通してひどく冷つく。なる程冷つく筈だといふ位の程度ではなからう。つまり、朝目驚く心もちだ。はし書きにもあり、歌自身緊張味を缺いた表現であるが、ともかく、のりくらといふことは表してゐるのだから外の山ではない。たゞ、それを甲斐の國としたのは、甲斐の國について知識のなかつた作者が、居合はす人々に教へられたのを誤り記憶して居たものとすべきであらう。

どうもさきくの諸君はこの邊はなか／＼手荒くかたづけてゐられるが、この歌や「妹と寐る」の歌は、曙覽の生涯の作物の中でも有數なものに勘定しなければ、曙覽としては實は何が残るかと言ひたくなる程、代表的なものだと思つてゐる。私どもはこの「み雪つもれり」の句をいひ据ゑる程の力はまだない。たゞ、よいとしてほめることも出来るが、「乗る駒の鞍の高嶺」は歌といふことがわづらひしてゐるのは事實だらう。

菊 萱

敏鎌ごりかりしかるかや 葺きそへて、聞か^(け)ばや、

庵のあきの夜の雨 (四)

【正】 かう言ふ歌を讀むと、私は曙覽の生活に、どうもある不徹底さがあつたらうと感ぜられてならぬ。彼が富める家の子であり、隱遁生活に入つた後清貧に安んずることはあつても金の贈呈をうける様なことも割合に易く、生活に或大様な一面があつたらしいことを知ると、芭蕉の場合の様な緊張がない様に思ふ。隱遁其ものがこの道に専念する爲でなかつたらしいから、それも當然かも知れぬが、さう深く考へなくとも彼に家庭の苦勞はあつたにしても、まだやつぱりぼつちやんらしさがぬけきらぬ感がする。そんな氣もちを以てこの歌を味ふと、曙覽の作歌態度から見れば、當然まう少しの迫力がなくてはならぬと思ふのに、やつぱり力が弱い。この歌は荳と言ふ題にふさはしく、縁語を老巧に一つの興味を詠んでみたと言ふ程度ではなからうか。「かりしかるかや」が、この歌の中心をなして居ると思ふ。そして風流がつて居るよりも、むしろ私には人のよさがぼんやりと感ぜられて来る。

【周】 かういふ歌は、一種の趣向歌といふべきものか。題詠である關係からか、自由な、生き／＼した所がない。而もこの歌は荳を歌つてゐるので、「秋の夜の雨」は主でないのである。随つて「敏鎌とりかりしかるかや」にも、作者の興味のかゝつてゐる事を見逃してはならない。荳は優しいもので、勿論屋根を葺くものではない。普通の荳に荳を葺きそへ、その上にそゞう秋雨をきくといふ所に、作者の風流がある。更に興味は敏鎌をとつて苧りとつた所にまで溯つてゐるのである。苧りとつたのは、やはり作者と見なければならぬ。私らの態度からいへば、特別の場合でない以上は、敏鎌とり云々、と言はなくてもいい様である。殊に敏鎌だらうが、さびた鎌